

2018 Gold Wing のスタイリングデザイン ー カラーリング ー

Styling Design for 2018 Gold Wing
ー Coloring ー

桂 川 碧¹

Midori KATSURAGAWA

要 旨

2018 Gold Wing のカラーリングデザインにおいて、唯一無二の「飛び抜けた存在感」を生み出すために、カラーだけではなく、素材、表面処理にまで踏み込んだカラーリングをおこなった。新色の赤色では、透明感のある彩度と深く落ち込むシェイドによって、劇的な色彩を実現した。車両の下側領域における金属質感の演出においては、全体的に黒色で覆われている中で、部分的な金属露出をすることで、より明快に金属感が向上する手法を適用した。これらの手法を持って、フラッグシップモデルとしての、「飛び抜けた存在感」を表現するカラーリングを実現した。

ABSTRACT

For the 2018 Gold Wing exterior design, the coloring design was carried out involving materials and surface treatment as well as the colors themselves, pursuing to create a “presence like no other” in its design. In the creation of the new red color, deep color saturation yet having clearness, and shadow falling to intense darkness were employed to represent a dramatic hue. In the expression of metallic feel of lower area on the vehicle body, the method, in which metallic expression is explicitly enhanced by exposed metal parts partially arranged within the whole area mainly outfitted in black color, was applied. By using those methods, the coloring design that represents the “presence like no other” deserving for the flagship model was successfully materialized.

1. はじめに

Honda 二輪車のフラッグシップモデルである Gold Wing が、前モデルから 17 年のときを経て、フルモデルチェンジされた (Fig. 1)。本開発にあたり、これまで培ってきた長距離ツアラーとしての魅力の継承と併せ、Generation X など新しい顧客層となる世代を取り込むため、開発コンセプト、「The Honda Premium Tourer 二人の感動にいつそうの輝きと充実を」が定められた。そこには、軽量化やコンパクト化、時代をリードする先進性などが盛り込まれていた⁽¹⁾。

一般的に、商品魅力を認識する第一歩は視覚情報によることが多い。そのため、色彩を含めた外観デザインが持つ影響力は大きい。特にカラーリングは、人の気持ちにダイレクトに訴えかけ、瞬時にその商品の持つコンセプトを伝えるという機能を持つものといえる。

今回この Gold Wing のカラーリングを、カラー、マテリアル、フィニッシュ (Color, Material, Finish: CMF) の全域にわたりマネージメントしていくために、存在感や

たたずまいといった、視覚を超えた感覚に訴えるカラーリングについても考察した。見た瞬間に心を震わせる色彩表現、新しい金属質感の表現、なども併せて、テーマとして設定した。



The Gold Wing Tour DCT Airbag (2018)

Fig. 1 Appearance of 2018 Gold Wing Tour

¹ 二輪 R&D センター

それぞれの具体的な取り組みについて、例を示しながら述べる。

2. Gold Wing シリーズのカラーラインナップ

まずは、2018 年モデルとして設定された Gold Wing シリーズの、全カラーラインナップを紹介する。この中から、それぞれの国や地域によってカラーの選択がされる。

今回の Gold Wing シリーズには、リヤトランク標準装備

の Gold Wing Tour と、リヤトランクレスの Gold Wing という二つのタイプのモデルが設定されている。

リヤトランク付きの Gold Wing Tour には 3 色のバリエーションを設定した (Fig. 2)。トップグレードとなる、Gold Wing Tour の Airbag 装着モデルには 2 色を用意し、うち 1 色には専用のグラフィックを施した (Fig. 3)。

また、リヤトランクレスの Gold Wing には 3 色を設定した (Fig. 4)。



Fig. 2 Color lineup of the Gold Wing Tour



Fig. 3 Color lineup of the Gold Wing Tour (airbag-equipped model)



Fig. 4 Color lineup of the Gold Wing

3. カラーリングテーマの設定

3.1. 各時代における Gold Wing のメッセージ

現代ではさまざまな商品分野において、Matured markets, 成熟市場という表現が用いられている。そのような市場状況のもとでは、商品開発においても、単に機能や性能を向上させるだけではなく、作り手の哲学や想いが重要な要素となっている。そこにお客様の共感を得ることができて、はじめて商品ブランドが形成される。

今回 Gold Wing のカラーリングデザインを検討するにあたり、お客様、ユーザに対して我々が伝えたい想いは何であるのか、歴代 Gold Wing のメッセージを振り返ることからはじめた。各時代のメッセージを Table 1 に示す。

このように、我々は Gold Wing から発信するメッセージを、時代の変化と共に進化させてきた。これらのメッセージに込められた想いの実現を通じて、Gold Wing はお客様に評価され、他のモデルとは一線を画す唯一無二の存在となっていく (Fig. 5)。

カラーリングデザインをおこなう上でも、次の世代のお客様が、Gold Wing と共に特別な時間を過ごすことができるように、という想いを込め、カラーリングにおけるメッセージとしてのカラーリングテーマを定めることとした。

3.2. 飛び抜けた存在感とカラーリングテーマ

歴代の Gold Wing が唯一無二であり続けることができ

Table 1 List of messages appeared in past catalogs

	Period	Message of catalog copy writing
1	1975-1979	King of motorcycles
2	1980-1983	The Interstate of the ART
3	1984-1987	Leading where no one can follow
4	1988-2000	An Extraordinary touring performance
5	2001-2017	Gold Wing is the gold standard of touring

た重要な要素に、その存在感がある。今回の Gold Wing では、さらにそれを超えた「飛び抜けた存在感」を表現したいと考え、新たなカラーリング手法を検討した。Gold Wing としての威厳を、ただそこに在るだけで体現されるたたくまいを通じて、感じることができることを目指した。

そもそも存在感やたたくまいといったものは、色や形といった視覚的、表面的なものに加え、質感や触覚なども含めたさまざまな感覚が影響し合うことで初めて認知されるものと考え。そのためには、単なる塗装の色調 (Color) にとどまらず、各パーツの素材 (Material) や、質感、仕上げ (Finish) の手法の違いがもたらす印象なども、統合的にマネジメントすることが必要となってくる。そこで我々は、カラーリングが持つ役割を広義にとらえ、「見た瞬間、触れた瞬間、またがった瞬間、感動し高揚させ、心震わせるもの」というフレーズを、カラーリングテーマとして掲げた。

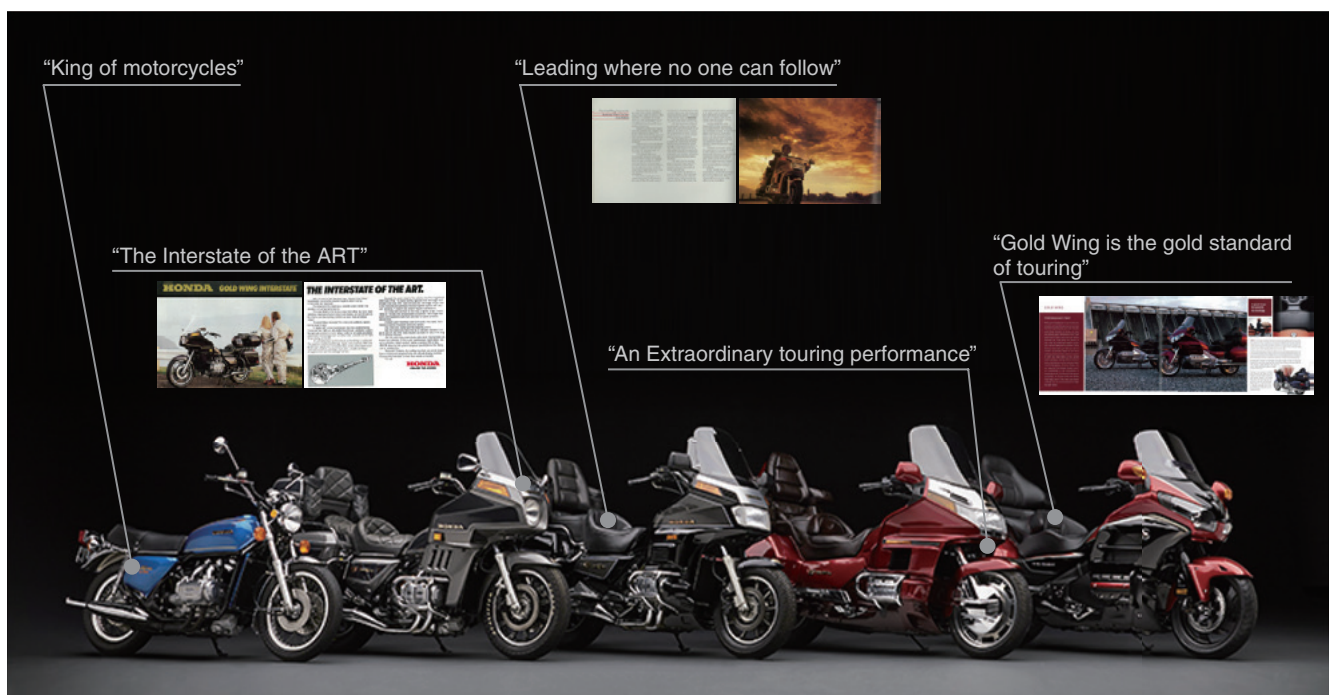


Fig. 5 Precursors of the Gold Wing

4. カラーリングテーマの実践に向けて

4.1. 統合的カラーリングマネージメント

カラーリング全体をマネージメントする観点から、それぞれの部品に対し、その役割に沿った質感処理を施すこととした。

唯一無二の存在である Gold Wing は、そのほとんどの部品が専用部品として開発される。そのため、各々の部品に対して最適な外観表現や表面処理をおこなうことができる。これは正に Gold Wing というモデルに与えられた特権である。具体的には、カラーパーツが多くを占める車両の上側領域には、高品質な塗装をはじめ、人が実際に触れる際の素材の色や触感、質感を追求し、丁寧に表現していくこととした。

一方、メカニカルパーツが多くを占める車両の下側領域には、機能と性能を支える個々の部品の存在を際立たせることを意識し、Gold Wing ならではの機能美を表現することとした。さらに、これら表情の違いによるコントラストにより、車両全体でフラッグシップモデルとしての上質感と、「飛び抜けた存在感」を表現することを目指した (Fig. 6)。

4.2. CMF

見た瞬間に心を震わせる色彩表現と、色彩を超える領域となる、マテリアルとフィニッシュについて考察した。

色彩表現については、これまでの Gold Wing においても、高級感のある色調にこだわって開発がされてきた。しかし、今回カラーリングにて付与したい、「飛び抜けた存在感」を表現するための、さらなる工夫が必要だと考えた。一瞬見ただけで心に強く残り、人の感情を突き動かす、そのような劇的な印象を与える色彩表現の実現が不可欠と考えた。

また、色彩を超える領域となる、マテリアルとフィニッ

シュによる質感表現にもこだわった。

しっとり柔らかい上質なレザーは、レザーの色だけでなく、触ったときの心地良い感触を持ち、その色と質感が一体となって記憶に残る。

また、パフやメッキを使い分けた金属パーツや、クリアコートによって塗装色に奥行きを付与するなど、フィニッシュの違いによって、赤、青といった色相だけでは表現きれない、高級感や上質感の表現もできる。

本開発においては、これら CMF 全体でカラーリングテーマを実践していく。

5. 具体的手法の紹介

劇的な印象を与える色彩を考えるにあたり、モータサイクルならではの動きや車体の姿勢にも着目した。モータサイクルは車体を傾けながらカーブを曲がる。また、路肩に停める際にはサイドスタンドを用いて、傾斜させた状態で停車させる。このような、モータサイクルならではのシーンひとつひとつが心に迫ってくるような、「飛び抜けた存在感」の表現を追求した。

5.1. 塗面表情による劇的な印象の表現

今回、Gold Wing に用いる塗料の開発にあたり、そのようなモータサイクルならではのひとつひとつのシーンが、劇的な瞬間となるように、塗面表情について熟考した。

濡れたような色の深みとハイライトに感じる彩度のきらめきと、そこからぐっと落ち込むシェイドを持つような塗装色を用いることで、対象部品の形状や、車両の動きによって切り変わる、塗面表情の落差を大きくする。そうすることで、車両の存在をより立体的に魅せ、劇的な印象を与える色彩表現ができると考えた。

本コンセプトに基づいて、今回 Gold Wing 専用に開発した新色、CANDY ARDENT RED と PEARL STALLION BROWN の2色について詳述する。

5.1.1. 新色 CANDY ARDENT RED の開発

(1) 赤という色の持つ意味と目標 赤は Honda にとって、その歴史が、常にスポーツ、パッション、チャレンジによって紡がれてきたことを物語る重要な色である。新時代のフラッグシップモデルを目指す本開発においても、これまでの赤の、さらに上をいく赤色にチャレンジしたいと考えていた。そのためには、見た瞬間に心を震わせる、上質で魅力的な赤を生み出すことが必須であった。また、色相としては、黄味にも青味にも振れず、赤の中の赤を目指した。

(2) 塗装構造による表情作り 現在、高級四輪車に採用される光輝材の多くは、ガラガラと派手に輝く大きな粒子ではなく、比較的小さな粒子を用いている。それにより、緻密さ、上質さを感じさせるのが、最近のトレンドだ。今

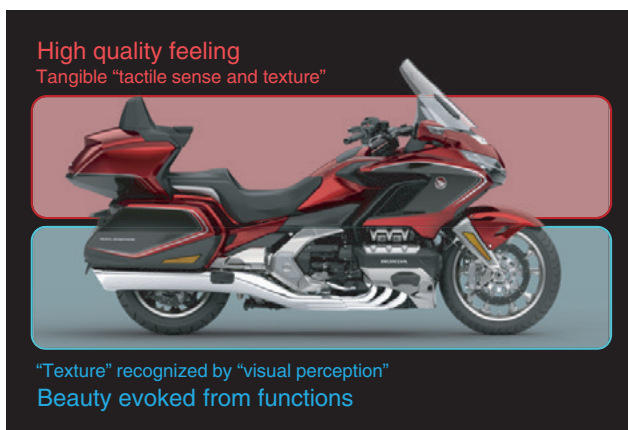


Fig. 6 Defining characteristics clearly separated in expressions of exterior color arrangements

開発の Gold Wing においても、同様の手法を適用し、劇的でありながら上質な色彩にしようと考えた。

透明感のあるカラークリアにより彩度を保ち、塗装面のスムーズな明度変化を感じさせることで、スタイリングされた形状の豊かな面を表現した。また、光の当たらないシェイド面への移り変わりでは、一気に明度が落ち込むことで、立体形状が生み出すコントラストを表現することを意識した。そのため、三層構造のキャンディ塗装仕様とし、色に奥行きを持たせ、フラッグシップモデルとしての上質感を表現した (Fig. 7)。このような色設計の下、新しい顔料や光輝材を採用しながら、繰り返し調色をおこなった。なお、ここでいうキャンディ塗装とは、金属フレークを含むベース色の上に、カラークリア層を持つ塗装仕様を指す。

(3) 確認と評価 調色中の色をモックアップモデルに塗装し、実車状態による色調確認をおこなった。塗装色は、塗られる面積や形によって見え方が異なってくるため、実際の大きさや形状を持ったモデルに塗装した状態で確認する必要がある。このように、立体による検証を何度もおこなうことで、新しいスタイリングをより美しく見せられているか、「飛び抜けた存在感」の表現ができているか、について模索した。すなわち、車両を遠くから眺めたときにも、人の感情を突き動かす、劇的な印象を与える色彩表現となっているかどうかを検証する必要があった。

調色の最終段階には、モックアップモデルを屋外に出し、他のデザイナーにも確認を依頼した。初めてこの新色の赤を目にした彼らは、「すごい」と声に出し、驚きの表情を見せた。そして、その驚きはすぐに「良い」という言葉と共に笑顔に変わった。その一連の表情の移り変わりを見たときに、目指していた「飛び抜けた存在感」を表現できたのではないかと感じた。Fig. 8 に旧来の塗色、Fig. 9 に新規開発色を示す。

(4) 決定塗料の仕様と効果 ベースコートには、従来のアルミフレークに対し、薄く滑らかな表面を持ち反射率

の高い、次世代高輝度着色アルミフレークを採用し、より強くシャープな輝きを実現した。また、カラークリアには、ナノ顔料を採用することで透過率を高め、ベースコートに到達する光の量を格段に向上させた (Fig. 7)。これらの材料の採用により、従来のキャンディ塗装では成し得なかった、高彩度を有する高い透明感を実現し、くっきりとした明るいハイライトと、濃い陰影を表現することができた。

これらにより、しっとりとしたような色の深みと、強いコントラストによって生み出された豊かな立体感によって、Gold Wing のプレミアムツアラーとしての「飛び抜けた存在感」を表現することができた。すなわち、その色を見た



Fig. 8 Conventional candy color

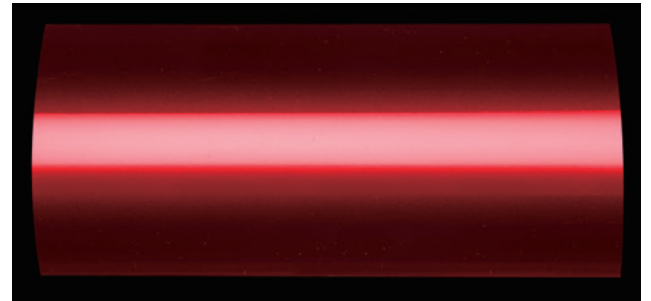


Fig. 9 Developed "CANDY ARDENT RED"

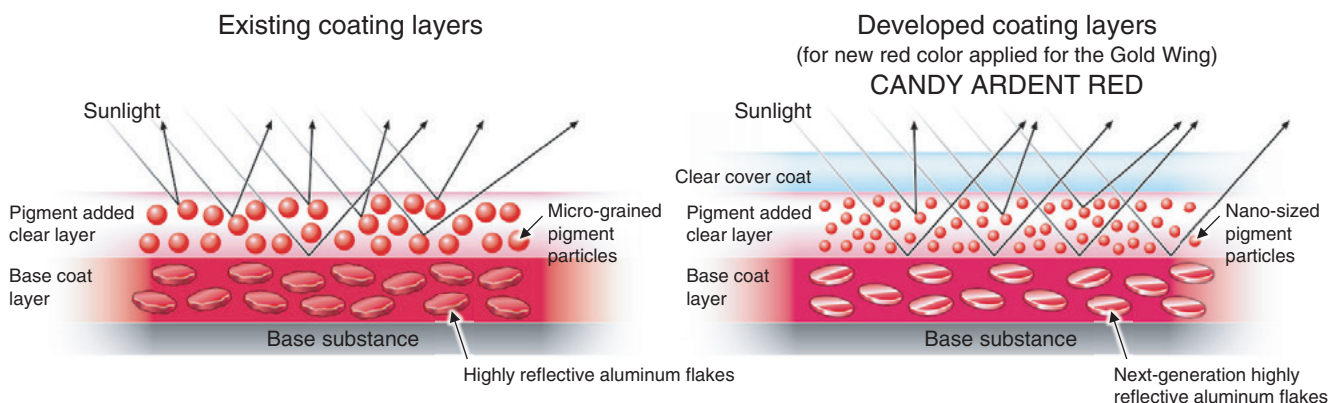


Fig. 7 Schematic drawings of paint layers comparing existing method and developed method applied for CANDY ARDENT RED

瞬間に、人の心を震わせ、人の感情を突き動かす、劇的な印象の、上質で魅力的な赤に仕上げる事ができたと考える (Fig. 10, 11, 12).

5.1.2. 新色 PEARL STALLION BROWN の開発

もう一つの新色、PEARL STALLION BROWN は、軽量、軽快なイメージの、トランクレスタイプの Gold Wing に向けた専用色として開発した。開発に際してイメージし



Fig. 10 CANDY ARDENT RED in rider's view



Fig. 11 CANDY ARDENT RED in front diagonal view



Fig. 12 CANDY ARDENT RED applied on trunk

たのは、陽光を反射するサラブレッドの躍動美だった。

モータサイクルは鉄の馬と呼ばれることがあるように、馬と重なるイメージを持っている。速さを競うために鍛え抜かれたサラブレッドの引き締まった体は、その馬の持つパフォーマンスを予見させる。筋肉の動きに合わせ、しなやかに美しい毛並みが輝く様子をイメージしながら、色の作り込みをおこなった。

前述の CANDY ARDENT RED 同様に、彩度の高さと深い陰影の両方を持たせることで、劇的な印象の色彩とした。光輝材は少粒形を選択し、スムーズな色の連続的变化による上質さを表現した。

また、このトランクレスタイプの Gold Wing は、フレームや足まわりのカラーを、ダークな色調でまとめている。詳細は6章で後述するが、それによって、スポーティさとすごみを表現した。

こうした車両全体のカラーマネージメントにより、Gold Wing のバリエーションによるコンセプトの違いを、よりいっそう明確に表現した (Fig. 13, 14)。

5.1.3. ツートーングラフィックの開発

トップグレードモデルの Airbag 装着仕様車には、前述の Gold Wing 専用色、CANDY ARDENT RED を主体色



Fig. 13 PEARL STALLION BROWN



Fig. 14 Looks of PEARL STALLION BROWN in driving scene

に、奥行きを感じさせるブラックメタリックをツートンカラーとして配し、最上級グレードにふさわしいシックで豪華な存在感を表現した。さらに、ピンストライプグラフィックを添えることで、スタイリング上重要な形状やラインを強調し、本モデル特有の美しさを表現した。

Gold Wing というフラッグシップモデルゆえ、追加される専用グラフィックについても、無二の上質感と存在感を表現しつつ、伝統と共に新規性も感じるものでなければならないと考えていた。しかし検討当初、キャラクタラインとなる稜線に沿ってストライプラインを引いてみたが、ねらったイメージには程遠いものであった。

ストライプなどのグラフィックは、本来はボデー形状の美しさを際立て、新たな価値を加えるのが役割である。そこで、このスタイリングのキーラインを探る過程において、デザインフロアを真っ暗にし、開発中のクレイモデルに光を当てることを試みた。光源を少しずつ動かしながら、光の当て方を変え、ラインの変化がどのように現れるのかを観察した。

すると、今までメインキャラクタだと思い込んでいた、一番外に張り出している稜線部分のライン (Line 1) ではなく、影となる、下方に向いている面の奥にある谷部分 (Line 2) に、一番強い光が凝集することが分かった (Fig. 15)。そこで、この Line 2 をキーラインとして、スケッチを描き直した (Fig. 16)。



Fig. 15 Deliberation in pursuit for effective key-line



Fig. 16 Defined key-lines for decorative graphics

その結果、本モデルのスタイリングをいっそう強調しながら、プロポーションの伸びやかさも表現するグラフィックを生み出すことができた。そして、それにより、ねらいとしていた最上級グレードにふさわしいグラフィックデザインのテーマとした、シックで豪華な存在感を実現することができた (Fig. 17, 18)。

また、本モデルのピンストライプには、触れた際に段差を感じにくい 53 μm 厚の、極めて薄いストライプシートを採用した (通常は 80-135 μm)。これにより、施したストライプがボデーに溶け込んでいるような質感が表現できた。

5.2. マテリアル、フィニッシュ領域での表現

5.2.1. 質感と触感を高めたシートレザーの開発

ー革シボ柄の検討ー

「飛び抜けた存在感」を演出するには、上質感もまた重要な要素である。本開発においては、Gold Wing にふさわしい上質な手触りを実現するために、樹脂部品やシートレザーに施すシボにも深くこだわった。

特にシートレザーは、新しいシボパターンを開発し、見た目の新しさに加え、触れた際に手に伝わる温度やしっとり感といった質感 (触感) に配慮した。その材質は、他の多



Fig. 17 Fixed key-line for decorative graphic on middle cowling



Fig. 18 Appearance with finalized decorative graphics

くの二輪車と同様、Polyvinyl Chloride(PVC)レザーを採用し、上述のような、より上質な手触り(触感)にこだわり検討を重ねた。

これまで、歴代 Gold Wing のシートには、大柄な革シボ柄が用いられることが多かった (Fig. 19)。これに対し現在のトレンドは、上品さを感じさせる中サイズの革シボ柄へと移行している (Fig. 20)。そこで、現在のトレンドにマッチした、高い質感の、新規の革シボ柄を検討した。

レザーの質感は、触れたときの肌に感じるしっとり感や、温度感覚によって変化する。それらはシボ柄による微細な凹凸と肌の触れ合い方の影響が大きいため、その形状を吟味して上質感を高めていった。

また、上質なレザーかそうでないかの感覚は、視覚情報にも大きく左右される。仮に本草を用いても、艶の度合いが過度に高かった場合など、私たちの視覚を通した受け止め方は、安価なビニール製品という印象を持つことがある。そのため、艶を抑えた、上品な見た目になるような表面の加工が必要となる。

その一方、二輪車のシートは、炎天下の直射日光や風雨



Fig. 19 Large texture design of leather applied for the previous Gold Wings



Fig. 20 Medium-sized texture design of leather that makes the elegance of the current trend

にさらされ、ライディングでこすられるなど、厳しい条件、取扱いの下で使用される。そのため、傷が目立たないような配慮も必要であり、完全なマット地にすることは容易ではない。これらの条件を満たしつつ、求める上質感を達成するために、光沢の度合いやシボ柄のサイズの細かな調整と、手触りの確認を繰り返し、新しい革シボ柄を作り出すことができた (Fig. 21)。それにより、今後の高級路線の基準とも成り得る、上質で上品な質感を持ったシートレザーを開発できた。

5.2.2. 車両下側領域における機能美の表現

機能美を表現する車両下側領域において、デザイン上おこなった表面処理などのフィニッシュについて、以下に述べていく。

まず取り組んだのが、金属質感表現の検討である。車両下側領域に配置されている、エンジンをはじめとした、さまざまな部品の素材は、金属や樹脂などが混在し、複雑に入り混じった状態となっている。カラーリングマネジメント観点より、それらの部品群に対して、金属質感表現で統一したいと考えた。

最適な手法を模索するプロセスで、二輪車以外のさまざまな製品について調査していたところ、ある高級一眼レフカメラが目にとまった。それは全体の印象は黒っぽいが、各種の金属質感を、ボデーの一部や取り付けられているパーツ類で見せるデザインであった。製品全体に金属が現れているよりも、全体的に黒色で覆われている中の、部分的な金属露出のほうが、より明快な金属感を感じることができた。この体験は、黒と金属表現の対比的配置を的確にマネジメントすることで、金属感を際立たせることができる視覚的效果を気付かせてくれた。黒色に囲まれた中に表出しているボルト一本に至るまで気を配り、金属素材をどのように効果的に配していくべきかを考えた。そして、



Fig. 21 PVC seat leather with grain patterns developed this time

黒とシルバーの面積比についても、上記考察を元に決定された。以上に述べた手法をもって、車両下側領域の見せ方が決定された (Fig. 22)。

5.2.3. 新しい水平対向6気筒に対するデザイン表現

コンパクト化された新エンジンの存在感を際立たせるため、エンジンの顔とも言えるヘッドカバーを、いかに精緻に美しく見せるか検討した。従来のヘッドカバーの表面処理は、クロームメッキのようなバフクリアであったが、本モデルではサテンバフを用いたヘアライン処理とした (Fig. 23)。

従来モデルは、全体的にメッキパーツをふんだんに使用し、きらびやかで豪華な雰囲気を演出していた。対して、本モデルでは、Generation X などの新たな顧客層のデザインの志向や時代のトレンドを強く意識した。そこで周辺のフレームやサスペンションなどは、マットで落ち着いた金属質感による、機能的美しさを表現することとした。さらに、サテンバフによるヘアラインのような、手仕事の技を感じさせる処理を施すことによって、ユーザにいつそうの愛着を感じていただければと考えた。



Fig. 22 Lower area of vehicle body with coloring design having intention to make metallic feel stand out



Fig. 23 Head cover with hairline treatment

6. キャラクタの違いによる世界観の演出

5.1.2. 項の新色開発 (PEARL STALLION BROWN) でも触れたように、本開発の Gold Wing シリーズには、トランクを標準装着しない仕様がある。前述のとおり、トランクレスの Gold Wing は、見た目の軽快さからも、スポーティな雰囲気を持たせている。そのため、フレームや足まわりなどの機能パーツの色彩表現においても、CMF 全体で視覚的に感じられる違いを設け、異なる世界観を演出した。

このバリエーションでは、ほとんどの車両下側領域の部品を、質感の違う黒、もしくはダークメタリックグレーで揃え、最小限のアクセントとして、ボルトやキャップのみに輝く金属表現を入れた。ダークでローコントラストな色調とマットな質感で構成することにより、迫力あるスタイリングを強調した。車両の下側領域のフィニッシュ違いによる全体の印象の違いを Fig. 24 に示す。

これら二つのバージョンを持って、幅広いユーザの気持ちに沿えればと考えた (Fig. 25)。



Fig. 24 The Gold Wing Tour and the Gold Wing



Fig. 25 Precious time spent with the Gold Wing

7. まとめ

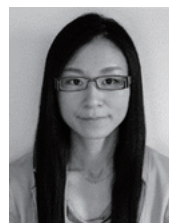
本稿においては、17年ぶりのフルモデルチェンジをおこなった Gold Wing の、カラーリングデザインに対して設定した考え方と、その具体的な展開手法についての概要を述べた。完成車全体としての質感を視野に入れ、そのものがまとう存在感までも表現するという領域にまで踏み込んで、色、素材、仕上げ処理の開発と展開をおこなった。そして、見る人の持つさまざまな感覚に訴えかける形でデザインを構成し、それを通して「飛び抜けた存在感」を表現した。

今回、このような想いを込めて展開したカラーリングデザインを通じて、人と Gold Wing が出会う一瞬を特別なものとし、心震わすロードトリップへと誘い、Gold Wing と過ごす時間をより豊かなものとするのができればと願っている。

参考文献

- (1) 会田樹穂子, 中西豊:2018 Gold Wing の開発, Honda R&D Technical Review, Vol.30 No.2, p.1-14

■著 者■



桂 川 碧